

## 舞踊学会第23回大会 特別講演

天理大学名誉教授 佐藤 浩司先生  
2018年6月9日(土)  
於 天理大学ふるさと会館



### 「雅楽に見る雅」

皆様、こんにちは。本日はこの舞踊学会の第23回研究大会によろこそ、この天理へおいでくださいました。誠にありがとうございます。これから私は少し雅楽についてお話をさせていただきたいと思っております。実はテーマをいただいた時に、雅楽、それから舞楽、とかいて日本の雅というテーマであったかと思うのですけれども、そのことにつきましてちょっとお話しておきますと、雅楽はですね、雅楽のジャンルの中に管絃、謡物、舞楽、という3つの分野があるわけです。ですから雅楽があって舞楽があるっていうのはちょっと変だなーという感じがいたします。雅楽の分野の中に管絃の形式と、それから歌を謡うことと、それから舞というのがあったわけでございます。

ただいま皆さんに見ていただきましたのは、最初は、平調(ひょうじょう)の曲で「越天楽(えてんらく)」という曲でございました。その平調の曲の「越天楽」に乗せてですね、この学校に学んでいらっしゃる創作舞踊の方々に、演舞を披露していただきました。仙波さんと金子さんでございました。とても素晴らしいことだなと思わせていただきました。それが最初でございました。そのあとに舞楽を2曲披露させていただきました。1曲目は「納曾利(なそり)」という曲、右方の舞楽でございます。後ほど、右方の舞楽についての説明は致しますが、右方の舞楽の「納曾利」という曲を見ていただきました。どんな感じでございましたか?その後、左方の舞楽で「蘭陵王(らんりょうおう)」という曲を見ていただきました。曲のそれぞれの部分が1つの様式に則っておりますので、いろんな曲がありました。1曲ではなくていろんな曲が組み合わさって組曲となっておりますというわけでございます。それが「納曾利」であったり「蘭陵王」であったりするわけですね。

#### ●「雅」という語について

それではまず雅楽について説明させていただきたいと思っております。まず最初に「雅楽に見る雅」というテーマでございまして、この雅という事について調べてみようと思っておりました。雅という、どういうわけか、「牙(きば)」に「ふるとり」なんですよね。なんでこんなものが雅という漢字にあてられているのかな、と思っております。この雅と

いう字を辞書で引いてみました。諸橋轍次という先生の『大漢和辞典』というのがございますが、その1番目のところに「ミヤマガラス」とあり、次に「ヤマガラス」というのがあり、そして「ハシプトガラス」、あるいは「ハシボソガラス」というように出てまいります。ミヤマガラスは渡り鳥ですから、あっち行ったりこっち行ったりするわけですね。あとヤマガラスは山にいるカラスですよね。その次のハシプト、あるいはハシボソ、これはどういうことかなと思つくと、漢字を見ていただくとわかると思うのですけれども、くちばしが太いからハシプトというわけです。そしてハシボソはくちばしが細いのです。「鳥綱、スズメ目、カラス科、カラス属」と全体的にはカラス属とされているのですが、中身は違う。例えば、ハシプトガラスとハシボソガラスでは、ハシプトガラスの方は、嘴が太く、体もちょっと大きい。ハシボソガラスの方はそれに対して少し嘴は小さい。体もちょっとちっちゃい。その歩き方もハシプトの方は、ピョンピョンと歩きます。ところがハシボソの方はピョンピョンとは歩かずに交互に歩くのです。これから皆さん、カラスを見た時に、ピョンピョンと歩くのはハシプト、交互に歩くのはハシボソと見ていただければよろしいかと思つきます。しかもですね、ハシプトの方は肉食です。ハシボソの方は肉食ではなくて、どちらかという植物、肉ではなく野菜類を食べる。ところがハシボソの方に“carrion crow”と書いてありますね。これは肉を食べる、死肉を食べる、ということで悪い名前だなという気はします。

雅という字の最初に出てくるのはこの説明なのです。第2番目のところに、「正しい」とか、「雅やか」、「淑やか」、「奥ゆかしい」というのが出てまいります。その次、3番目が「よい」、「麗しい」、4番目が「艶やか」、その次に「なまめかしい」と書いてあります。それから5番目は「聡い」、「明らか」、6番目は「素」素性という字、また「素より」。7番目に「常」あるいは「常に」、8番目に「正しい音楽」、9番目に「史の六魏のひとつ」、あと13ほどありますが、楽器の名称であったりします。雅っていうのはどういうことなのかなと考えてみていただいたらいいと思うんです。確かに原義は鳥であるのですけれども、そのほかに出て



も行けなかったのです。もちろん道真さん自身の問題もありました。結局は九州に流されてしまいます。でも本当は自分が行きたかったということもあるので、菅原道真さんは自分から廃止したのではないということをおきたいと思えます。

平安時代に、今日の雅楽の形が大成しました。何があったかという、国風化があったのです。国風化という、なにかいいように聞こえるのですけれども、中国と日本と朝鮮半島もそうです、交流がなくなってしまった。なくなったので、やむなく国風化になってしまったというわけです。奈良時代は、例えば中心部は20人に1人は外国人だった。そうするとその外国人から何を教わるかという、中国の言葉を真名と呼んでいますけれども、そのまま読めたり、書けたのです。ところがそれが平安時代になりますとそういうことができなくなってしまいますので、真名文字ではなくて仮名文字ができるわけです。そうしますといろいろなことが起こってきます。若宮のお祭りの日に、そこで芸能の場が開かれるのです。もう1000年以上続いております。その場所で「蘭陵王」という舞のですね、「囀（さえずり）」というのがあります。無音で舞を舞う、これをさえずりと呼んでいます。本当は、口で唱歌（しょうが）をして舞っていたのですけれども、ところがその言葉が全部なくなって、できなくなってしまって、このさえずりという無言のものだけが残ってしまいました。それから「詠（えい）」というのがあります。詠も今では伝わらなくなってしまいましたけれども、そういうもの、本当は自分が舞ってできたものが、言葉に出していたものがなくなってしまったという事は国風化が起こったのです。もちろん、国風化にはそれ以外のこともあります、特異な例として挙げました。

### ●雅楽の盛衰と一般化

それから、御遊（ぎょいう）というのがあります。これは天皇であるとか、あるいは上皇などが主催する管絃の遊びを御遊と言いまして、いろいろな場面があります。例えば、成人式を迎えたとかですね、なにか通過儀礼が行われた時にはですね、こうしたものが行われます。有名なのは天皇が自分の40歳とか50歳とかのお祝いをする時に、御遊が行われます。催馬楽（さいばら）と呼ばれるようなものが、この時期に盛んになってくるわけでございます。

平安時代には盛んに行われたのですが、1番大変だったのは応仁の乱というのがありまして、それまで伝統的にあったもの、言葉で伝えてきたものであったりだとか、あるいは装束であったり、あるいは楽器であったり、そういうのがどんどんなくなっていったんですね。逆に能だと

かが地方に展開していったわけでもあります。

応仁の乱のあと、武家が雅楽の再興を図ります。織田信長であるとか豊臣秀吉とかが、雅楽を奨励するようになったのです。例えば、織田信長の時です、再興したものですから、現在の宮内庁に音楽をする場所が宮内庁の中にあります。その中に演奏をする舞台があります。舞台の後ろに幔幕というのがあり、この幔幕がどういふわけか織田家の家紋がそこに刺繍されております。それから今日、皆さんが演奏を見ていただいた時に着ていた装束、元々は狩衣という装束を着たりするわけですけれども、狩衣ではなく、直垂（ひたたれ）を着ています。直垂は元々武家の装束です。頭には烏帽子を後ろにつぶしたような、「引き立て烏帽子」を被っています。引き立て烏帽子は、兜を被るためのものです。

江戸時代になりますともっと盛んになりまして、三方の楽所というのができます。京都の内裏を中心としたもの、もうひとつは四天王寺、そして興福寺と春日大社、これらが三方の楽所と呼ばれるものですね。盛んに雅楽が行われますし、紅葉山と書いてございます。これは現在の皇居、宮中です。催馬楽などの復興が行われていました。

この雅楽の継承は、現在の宮内庁の楽部に引き継がれます。もちろん、それぞれの寺社仏閣というところで行われています。先ほど言いました三方の楽所には、三方の大変芸の優れた人たちが東京に行ってしまうのです。明治維新のすぐ後、東京で、主に紅葉山で音楽をするということになるわけです。それぞれのところで何百年と行っているのですから、なかなか同じようにはいかない。演奏も舞もそうです。踊りを踊るけれども、全てがそのままにはいかない。

それぞれの伝統がありますから、一緒にしようというのには無理があります。それをどうしたかという、東京に集められた人たちは、全て、演奏も舞も、天皇にお返ししたのです。天皇陛下に舞や譜面をお返しして、天皇陛下が「これをやりなさい」ということでひとつにして与えたのです。これを明治選定譜と呼んでいます。これは明治9年と21年に行われています。現在まで宮内庁では明治選定譜しか演奏できません。それ以外にもたくさん曲があったのにできなくなりました。廃止してしまったのです。遠楽（遠い音楽）となってしまったのです。それ以外のところでは、天理大学雅楽部もそうですが、昔の演奏を復元しています。

それから一般の方が雅楽を、それまでは習得できなかった。神社や仏閣以外では、宮中でしかできなかったんです。明治6年になって「皆さん、雅楽をやっているですよ」となったんです。その後、いろいろな曲が出来上がってまいりまして、先ほ

ど紹介しましたが、「秋庭歌」というのがありまして、先日TVでやっておられたんですね。

### ●雅楽の様々な演奏形態

雅楽は先ほど申し上げましたように、アジア大陸の各地で生まれたものが入ってまいりまして、平安時代に完成した音楽である。この雅楽のジャンル、どのような演奏形態があるのかと申しますと、第一番目が「管絃」。この絃という字は、弓偏ではなくではなく糸偏です。なぜならば弓を使わないから。平安時代の貴族たちの嗜みは管絃だった。今から10年ほど前にセンター入試があり、試験問題に、管絃という字が出てきたんです。糸偏が正式なのですけれど、弓偏を書いてよろしいとなったようでした。私はそれは具合が悪いと言っているのですが。

その次は「謡物」、それから「舞楽」という3種類があります。管絃は三管、三鼓、両絃、3つの管楽器、3つの打楽器、2つの絃楽器でございます。笙（しょう）、篳篥（ひちりき）、龍笛（りゅうてき）という3種類の管楽器。それから、琵琶、箏（そう）の2種類の絃楽器、太鼓（たいこ）・羯鼓（かっこ）・鉦鼓（しょうこ）という3種類の打楽器ですね。

この3つの分野で行われることになるわけがあります。それでは管絃の例を見ていただこうと思います。（DVDによる映像）

次は謡物で、その中に催馬楽というものがございます。（スライドに）赤い字で書いてあるのが、今日、天理大学雅楽部が復曲、演奏したものとなっております。本当は64曲（天治本）ほどあるのですが、宮内庁で演奏されているのが10曲くらいしかない。それでは勿体ないという事で、これまでに雅楽部は27曲復曲してまいりました。

次は、舞楽についてです。舞楽は簡単にいうと、雅楽の楽器の伴奏に合わせて舞を舞うというものです。舞の形から言いますと、武舞、文舞、平舞というものがございます。また女性だけが舞う女舞、子どもだけが舞う童舞などがございます。平安時代に舞楽が左方の舞楽と右方の舞楽に分けられたというお話を先ほどいたしました。

演奏会場に行きますと、舞人は皆さんから見て左側から出てきて、左側に帰る、これが左方の舞楽です。逆に右から出てきて、右に帰るのが右方の舞楽です。1曲だけ左方から出て、右方に帰ることがあります。これは「胡飲酒」というもので、酒を飲んで酔っぱらったということです。左方の舞楽は赤色系統の装束で、舞人は唱歌を覚えて行っていく。右方の舞楽の演奏の形からいいますと、笙というのが入らなくて、高麗笛という楽器、それから羯鼓に代わって三ノ鼓が使われます。そして舞人はリズムに乗って舞う。学生さんに来て

もらっていますので、後でやってもらいたいと思います。右方は曲を覚えるのではなくリズムで舞います。〈雅楽部の学生が壇上で実演〉というように右方は拍子で舞って、左方は曲を覚えて舞います。

舞楽にはいろいろな曲がありますのでそれを今から見ていただきたいと思います。（DVDによる映像）

採桑老（さいそうろう）というのがあり、これを舞うと死ぬという事が言われております。なぜ死ぬのかと言いますと、これまで舞った方が、全員年寄りだから死んでしまったんですね。でも、本当はこれはいい舞なのです。30代では非常に元気で、そこから歳を重ねるごとに少しずつ衰えていく。しかし、100歳になってもまだ舞えるという、いい舞なのです。

次は右方の舞楽で延喜楽（えんぎらく）というものを見ていきましょう。（DVDによる映像）

ご覧の通り鳥甲（とりかぶと）を被ります。何のために被るかと言いますと、演奏者は、これのおかげで前の方に音が出るのです。舞楽に「蘇合香（そこう）」という曲がございます。組曲形式で出来ており、これを全て演奏しますと5時間半かかります。

次に、伎楽というものがございまして、これは仮面をつけて舞うものであります。これを天理大学雅楽部が復活させたという事でありまして。元々、推古天皇の20年ですから、612年に百済の人が飛鳥の少年たちにこの舞を教えたとされています。その辺りの大きなお寺でも行われ、九州の方でも行われていたと日本書紀などにも書かれています。ところが、奈良時代は盛んだったんですけど、東大寺落慶法要の際にも盛大に行われていました。平安時代になりまして、だんだんと無くなってしまいました。装束が無くなったであったり、お面がわれてしまったであったり、そういったことが記録として残っております。それらを上手に復興することが出来なかった。その間に中央では廃れていってしまった。私が考えますには、中央では無くなりましたが、各地で普及していったのではないかと。現在、各地で獅子舞が出てくるだとか、猿田彦が出てくるだとか、あるいは、天狗の舞が出てくるだとか、こういうものは全て伎楽から来ている。現在日本では300くらい演技しているところがあるということです。

昭和55年、東大寺の昭和の大修理の際に伎楽が復活します。なぜできたか。そこには資料や人々の功力もありました。その資料にどのようなものがあったかと言いますと、伎楽のお面が正倉院にあります。毎年、正倉院展というものが10月の末から11月にかけて行われております。そこに伎楽面がそのまま展示されています。それから、若干

でありますけれども、譜面が残っていた。それから、雅楽の中に色々な演奏の形式を残していたという事です。それでは伎楽のことを少し見ていきましょう。〈DVDによる映像〉

楽器も笛は同じですけど、他は違います。このように天理大学雅楽部も伎楽というものも行ってありますし、例えばジャズであったり、白塗りで踊る前衛舞踏の「白虎社」が京都にありました。今はもうその団体は無くなってしまいましたが、その演奏もずっと引き受けておりました。

という事で、私の与えられた時間が参りましたので、この辺で私の講演を終わらせていただきますと思います。どうもありがとうございました。